

Kazuo'KAWASAKI's official Blog

川崎和男ブログ / Consilience Design / 学際的解決

2012年3月4回

1. 「『SILK』 Project が示唆している重大さ」

3月1st, 2012 Posted 12:00 AM



金沢 21 世紀美術館での現代アートはいつも共時性があります。それこそ美術館の社会的存在性＝効能性にいつも驚愕させられるのです。

私は米国在住の日本人アーティスト・角永和夫氏の作品「SILK」は、その制作から廃棄までというドキュメンタリーでジャーナリスティックな芸術表現の恣意性に呪縛されました。

9mx15m の漁網上に2万頭の蚕が室温 27 度の中で三日三晩かけて平面繭を吐き続ける「家畜行為」を利用、自然界を人間が制御することの根源的な意味性を私たちに投げかけているのです。

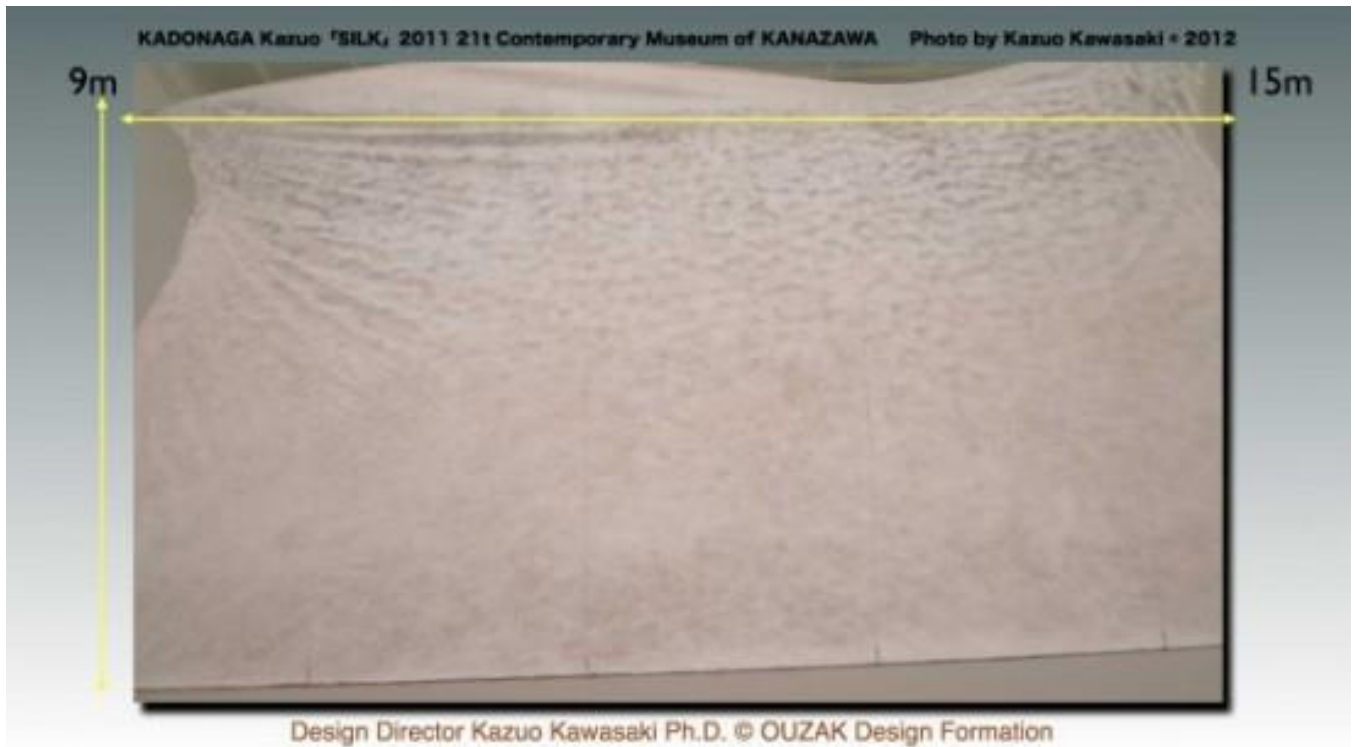
私は、「自然との調和などありえない」、と主張してきました。

蚕・養蚕産業・家畜・人工的な改変・産業廃棄物すべてを芸術表現とすることで、人間、人工的行為と自然との対決観を見せつけられました。

この芸術表現の恣意性が全く共時性があるということを熟考してみてください。

2. 「蚕が平面繭をひたすら吐き続けた『SILK』」

3月2日, 2012 Posted 12:00 AM



蚕は「家畜」ゆえに、一匹ではなくて一頭と呼びます。「家畜」という存在を人間は自然からその生命を剥奪することによって作りあげました。人間が自然を手なづける＝制御と管理を図った大きな事例が「家畜」です。しかも最近の蚕は遺伝子技術で、人間から繭形成までコントロールされています。

アーティスト角永和夫氏の「SILK」が投げかけ問いかけている問題の本質は、「家畜」という自然界での存在性を人間の利得保持だけをめざした略奪行為にほかなりません。2万頭の蚕が美術館のセット漁網にひたすら三日三晩繭を吐き続けるのです。しかも彼らは上に登っていく習性があるために、漁網もそれに対応する機械仕掛けです。これはアートとしての作品づくりに蚕の特性と習性を利用してあります。美術館の一室は27度室温が保たれるとともに、作家のみならず美術館スタッフも動員し蚕を漁網に取り付けさせる支援をしますが、人間は全員、防護ユニフォーム＝原発作業員と同じ服装にならなければなりません。「家畜」である蚕とのインターラクシオン性は、まさに原発事故に立ち向かうことを象徴しています。さらに、命尽き果てるまで繭を吐き続けた蚕を桑畑で余生を、と図りますが、2万頭は、産業廃棄物ゆえに桑畑は汚染されてしまうこととなります。

自然界から利得だけを獲得しようとする人間は、あらためて「家畜」という自然界との対決において何が重大であるのかを再熟考させられる問題の前に立たされているのです。

3. 「芸術という技法が引用したことから」

3月3日, 2012 Posted 12:00 AM



2012 © Provided by 21st Contemporary Museum of KANAZAWA, All rights reserved

アーティスト・角永和夫氏は、芸術という技法で、私たちに突きつけてきた事実でした。芸術技法がその事実を訴求していることです。私のまなざしの評価軸＝物差しは、宮川淳から学んだことで咀嚼してきました。だから「引用」ということばでまとめると、この芸術は「自然と人間の関係」を蚕という「家畜の存在」を引用していることです。蚕が、今ではすっかり遺伝子操作された繭として身体を包むのではなくて平面繭を吐き続けます。そして、その役割を終えた命を自然界に戻すことはすでに限界、役目終了の命は産業廃棄物だという事実。繭は絹という人間にとって素晴らしい美の素材を与えてくれますが、蚕を家畜とする人間・対・自然は、果たして人間が自然への対決を目指した成果でしょうか、それとも自然界を見事に利用した調和でしょうか。どちらなのかと言い切る事はすでにアポリアになりました。私は、たかが蚕という虫に過ぎないからとか、人間の文明＝飢えと寒さから絹織物で身体を護ること、その意味性を問い直します。蚕を引用し再度検証し直さねばなりません。芸術という技法は、人間と自然の関係に「蚕と繭」を引用して見せた作品です。私はこうした「引用」を差し出すアーティストを敬愛します。だからこそ、芸術家の問題意識をデザインは真正面からその問題解決に向かう姿勢が必要です。まさしく、モホリ＝ナジが「デザインとは社会に対する姿勢」と言い残したことに通底します。私は「繭と原子力」をこの引用から引き出すことさえ可能と考えます。彼のこの芸術的営為は、米国を拠点としていることもあって、自然保護団体からバッシングされていると美術館のキュレーターの方々から聞きました。私はこの作品制作の全過程をDVD出版してほしいと伝えました。金沢 21 世紀美術館からは記録 DVD15 分をいただき、何度も見ました。したがって、このブログでの写真はすべて作家と美術館から拝借したものです。今日は「ひな祭り」です。女の子の成長を絹織物の着物を纏って祝います。自然からの文明を創出した繭から絹素材が身体を護ります。「ひな祭り」は文明から引用し昇華された文化という制度です。

4. 「蚕は自然・遺伝子操作の繭は『反自然』か」

3月4日, 2012 Posted



アーティスト・角永和夫氏の作品「SILK」は、自然と反自然を提示しています。ここから私達が学び取ることは、自然と人工の問題です。文明＝飢えと寒さへの人間栄為は、自然への人工的な制御技術の獲得でした。人間が自然、その総体である地球環境で生き延びるためには「自然」から科学をそしてその具現化としての技術を進化させてきました。結果、この作品が見事に提示してみせた人工とは「反自然」であり、蚕が遺伝子操作によって平面繭を「美しく」吐き出して死を迎えます。しかし、その労働を終えた蚕は産業廃棄物になり、地球環境には戻せないという現実問題と直面したのです。「反自然」＝人工とするなら、人工の成果は廃棄物になっていくことが決定しています。それは地球に在ってはならない存在を生み出してしまうことでした。自然と人工に循環という理想型を人間は未だに準備できていません。これが現代の文明を呪縛し包含し解決不可能＝アポリアとして人間界を閉じ込めています。この作品は、蚕と繭です。この作品が自然保護団体から「反自然」と誹謗されている構造は、「反原発」に重なります。「反」を唱えることはアポリアを全面肯定している正義性に見えます。が、人間が生きることを全面肯定するには、「反」を掲げた問題設定では解決はありえないと私は考えます。人類にとって、原子力・放射能に対しては、「反原発・脱原発」・対「原発推進」の構造ほどアポリア全てを、実は、同一次元で全肯定しているのです。原子力・放射能への「反原発」だけでは、自然との調和などは智恵不足に他なりません。自然との調和などありえないからこそ、もう祈りにも通じる智恵が絶対に必要不可欠です。人間は、生から死までを真剣に受け入れて「生きがい」をもって自然なる死に至らねばなりません。「反原発」というシュプレヒコールでは問題解決不可能なのです。私は原発推進派と誹謗されていますが、そんな立ち位置にいるわけではありません。人工物・自動車による交通被災で歩けなくなり、人工物・ICD＝除細動器で心臓を護り抜いています。私は、「反原発」ではなくて「範原発」です。この根本は、「範自然」観をデザインで創出することだと考えているからです。